

九州の星

Star of Kyushu

Special

| 71 |

頑張るあなたを
応援するコーナーです

田中 愛己 × 田中 孝林

兄の田中愛己さんは印鈕作家・書家、弟の孝林さんは画家。
福岡市にアトリエを構え、美術館で兄弟展を開催するなど
活躍が目覚ましいお二人をインタビューしました。

印鈕作家・書家

田中 愛己 (兄)

Profile

福岡市出身・在住。

2002 年に大東文化大を卒業。

2008 年中国美术学院大学院

卒業。福岡市と中国・杭州にア

トリエを構え活動中。

GALLERY大手門にて
毎月1回展示しています。

お問い合わせ

住所：福岡市中央区大手門3丁目1-5

電話：092-751-2108

画家

田中 孝林 (弟)

Profile

福岡市出身・在住。

2003 年東京造形大造形学部

デザイン学科卒業。

国内外で個展を開催している。

いん ちゅう
印鈕作家・書家

田中 愛己

公式 HP



Tanaka chikaki



本場中国で修業した 稀有な存在の印鈕作家

印材から古獣と呼ばれる龍などの想像上の動物や蛙などを生みだす、印鈕作家・田中愛己さん。その作品は、無機質な石がまるで生命を宿したように躍動感に満ち溢れている。

印鈕とは、印章のつまみ部分に施された彫刻のこと。愛己さんは、数十種類の道具を使い、手作業で石を削り彫っていく。その加工技術と芸術性は高く評価され、日本はもとより中国でも唯一無二の印鈕作家だ。

愛己さんは書と篆刻の知識を深める為、大東文化大学を卒業後に中国浙江省杭州市にある



《水龍》巴林石 2.8×0.7×8.7cm

中国美術学院へ留学した。「石の魅力に引き込まれ印材店に毎日通い、店の人に印材の見方を習ったり、買い付けに同行し原石の仕入れをする迄になりました」。その印材店で気になる印鈕を見つけた。それが、後に師と仰ぐ柯正法先生が彫った印鈕との出会いだった。

中国で印鈕に魅せられ 弟子入りして技を磨く

柯先生に弟子入りを志願した愛己さんは、学校が終わると、先生のもとへ通う生活が続いた。大学の担当教官からは「日本人が習うことはできないし、身に付けるには時間がかかる。やめてお



《靈芝と蟠虎》巴林石 8.0×5.6×15.2cm



《蟠虎》巴林石 3.0×2.9×8.0cm



たほうがいい」と止められた。事実、修業は中国の仲間です。でも脱落するくらい厳しいものだった。半年くらい経ったある金曜日、先生から「これを一日見ていいよ」と印鈕を手渡された。一日中見て印鈕を先生に返すと、今度は新しい石を渡されて「月曜日までに今日見た印鈕と同じ形を彫つてきなさい」と言われた。「今思うとあれが入門試験のようなものでした」。先生のもとで観察眼と表現力が鍛えられた。

高い芸術性と技術が認められ 上海の国立美術館で個展開催

愛己さんは中国で印鈕の修業を重ね、中国



《蛙》昌化石 4.1×4.1×3.6cm

美術工芸品展では受賞を繰り返してきた。2019年には上海の国立美術館「韓天衡美術館」で個展を行った。中国を代表する書家・篆刻家・書学者・收藏家である韓天衡先生の美術館で個展を行うのは作品が認められたことを意味し、大変名誉なことだ。

新型コロナウイルス感染症が流行する前は月に2、3回中国に行っていたが、今は日本でひたすら作品作りをする日々を送る。

「福岡は志賀島で金印が見つかるなど、印鈕と縁が深い場所。印鈕のことをたくさんの人に知ってもらいたいです。印鈕を手にしたら、光にかざして石の色と彫りを楽しみ、手に持ってゆつくりと眺めてください。印鈕は手に収まる小さなものですが、そこには美しい世界が広がっています」

自然の大切さ、感謝の 気持ちを絵筆に込める

鬱蒼^{うつそう}と茂る木々の間から差し込む暖かな木漏れ日、道端でひっそりと咲く可憐な花——。田中孝林^{たなか}さんの絵画の根底にあるのは自然への讃美と畏敬の念だ。

小さい頃から絵を描くのが好きだったという孝林さん。「3歳の頃から、絵画教室に通っていました。教室では技術的なことよりも、子どもの想像力や感性を伸ばすことを大切にしていただったので、のびのびと絵を描くことができました」

中学3年生から高校にかけては、バンド活動に熱中。ギターを担当し、作曲も手掛けた。同時に、コンクールや公募で絵の賞を取り、美大に進むことを決心する。

東京造形大学に入学し、19歳で「第68回独立展」に初入選。その他、数々の賞を受賞。また在学中に東京と福岡で開催した個展で、多くの方から「生き生きとした花や自然を描いた絵に元気をもらった」「常に新しい事にチャレンジしている



SNSに投稿しているパステル描の誕生花

姿勢に感動した」などたくさんの言葉をもらった。「『人に喜んでもらえる仕事なら好きな絵を描きつけていきたい』と、画家では食べていけないという周囲の反対もありましたが、家族の協力もあり、画家の道に進む事ができました」

コロナ禍で苦しむ世界の人に 夢や希望、癒しを届けたい

新型コロナウイルス感染症で緊急事態宣言が発令された際、孝林さん主宰の絵画教室や美術館も休業を余儀なくされた。出口が見えない閉

塞感の中で「辛く困難な時でも、夢や希望があることを伝えたい」と、毎日作品を制作してSNSに投稿した。

ある日、いつものようにパステルで描いた誕生花を花言葉と共に投稿したところ、多くの人にシェアされ世界中からメッセージが届いた。「ロックダウンし、家から出られない」「家族が亡くなった」「職を失った」不安や悲しみを抱えた人たちから、「誕生花の絵を見て心が癒された」と言葉が寄せられた。

「自分の絵が、人の為に少しでも力になれるのであれば、描かないといけない。描き続けなければいけない」そう心に決め、もうすぐ2年目になるが、今も毎日SNSに投稿を続けている（現在はInstagramストーリーズで投稿）。

美術館で兄弟展を開催 海外でも個展を開きたい

「コロナ禍でも負けない。どんなに困難な状況になっても制作し続ける」という意思表示と共に、こんな時だからこそ展覧



楕円形のキャンパスに描かれた風景画

画家

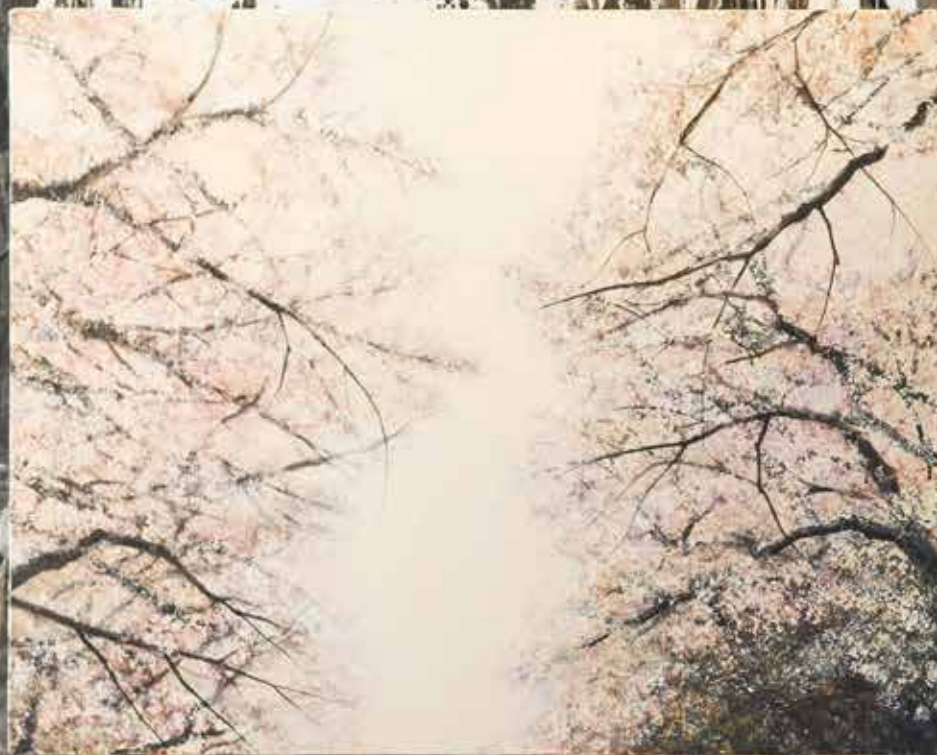
田中孝林

Tanaka takaki

公式 HP

Facebook

Instagram



《白い街のように》 242×333mm 墨、彩色、水彩紙

会を開かないといけない」と、2020年から「福岡市美術館」を皮切りに「福岡県立美術館」「福岡アジア美術館」で兄弟展を行った。

「コロナが落ち着いて、以前のように海外に行けるようになったら、海外でも個展を開きたいですね。現地で描いた作品も飾り、たくさんの人に絵を見て楽しんでもらえると嬉しいです」